

## 元公務員から見た弁護士業界

会員 今村 武史



## ■ はじめに

私は、大学卒業後11年間、某省庁にて公務員をしていた。ちょっと老けた新人弁護士である。日々、若い同期とともに一から弁護士業務を学んでいる。

## ■ 転職の理由

役所では多くのやりがいある仕事に恵まれた。しかし、仕事に面白みを感じるほどに、早ければ50代で第一線から退く人事制度への違和感が大きくなった。まだ自分に柔軟性のあるうちに、自分次第で「定年」を決められる弁護士業界に移るのも面白いのではないかと悩み始めた。どちらの選択も魅力的に思えたが、ならば新しいことに挑戦しようと考え、司法試験の勉強すら始める前に退職してしまった。この選択が正しかったかどうかは、これからの自分の努力次第で決まるものだと考えている。

## ■ 事務所訪問

事務系キャリア官僚の採用システムは、国家公務員試験合格者が希望する省庁を訪問し、面接を経て内定を得るというものであり、修習生が所属事務所を決めるシステムと非常によく似ている。最大の違いは、公務員では試験に合格しながらどの省庁にも入れない者が多数いるのに対し、弁護士では、司法試験に合格しながら弁護士になれない者はほとんどいない点である。ただ、今後の司法試験合格者増により、この点まで公務員と同じとなる時代がくるのかもしれない。

## ■ 業務の内容

当初から漠然と企業法務に携わりたいと考えていた。行政庁にて、企業の健全な経営や発展がなければ世の中はうまく行かないことを思い知ったせいもある。その中で現在の事務所を選んだのは、特定の専門分野にとらわれずに企業法務全般を扱い

つつ、訴訟など典型的な弁護士業務も経験できるところが、欲張りな自分に合っていると感じたからである。入所以来、M&Aや会社法の各種手続、訴訟、執行など多種多様な案件を経験させてもらった。次に一体どんな分野の案件が回ってくるか予想もできないスリリングな毎日を送っている。

## ■ タイムシートの呪縛

役人時代に比べ、労働時間は減った。しかし、仕事による疲労感は逆に大きくなった。その一因に、タイムシートによる時間管理があると思う。タイムシートとは、自分がどの案件のどんな作業のために何分間費やしたかを記録するものであり、報酬請求額を決めるベースになっている。同時に、タイムシートを見れば自分がいつ怠けたかが一目瞭然でもあり、それゆえに仕事中は一瞬も気が抜けないという強迫観念におそわれ、雑談もろくに楽しめない。単に年のせい、との噂もある。

## ■ めざす弁護士像

私の最大の趣味はゴルフである。修習中、弁護士同士の平日のゴルフコンペに参加する機会に恵まれた。平日にゴルフなど公務員時代では考えられなかった。それ以来、私の理想の弁護士像は、平日にゴルフができる弁護士である。しかし、実現の日は遠い。

## ■ 終わりに

仕事の本質は、官僚も弁護士も同じだと感じている。修習時代、「これからの弁護士は、かつてのようにバラ色ではない」と語る諸先輩にはいつも強烈な違和感を覚えたが、志の高さこそが問われているという激励であると今は受け止めている。弁護士としてどうあるべきか暗中模索しつつ、目の前の案件に悪戦苦闘する日々である。